

「ワタシハココニイル」

中村 裕

寂聴記念会の皆様には、すでに私の素性は知られていると思うが、私は、ドキュメンタリー番組のディレクターとして、2004年から17年間、私が《先生》と呼ぶ瀬戸内寂聴さんの密着取材を許され、9本のテレビ番組、1本のウェブ配信番組を制作した。先生が亡くなってからは、映画「瀬戸内寂聴99年生きて思うこと」を突貫工事で編集し、公開した。その中で、「私と先生の関係はどんな関係なのか」と語り合うシーンがある。

先生はこう言った。

「裕さんと私は母親と息子か、親戚の叔母と甥みたいな関係かなと思っているんだけど、あなたに以前聞いたら、『いや男女の関係ですよ』と言うから『へえー』と思った」。

私と先生は、初対面の頃から不思議とウマがあった。文学に疎い私は、文学談義の相手はできなかったが、雑談なら何時間でも付き合うことができた。

出会って一年後くらいだったか、先生からラブレターのような手紙をいただいたことがあった。原稿用紙に認められたその内容は、

「転倒して頭を切って出血し、意識が遠のいたとき【裕さんにもう会えないかと思うと寂しいと思った。】そのことを言っておきたかった」というものだった。

私は自分の気持ちをどんな言葉で伝えようか思索した挙句、アメリカのSF小説に登場する不思議な宇宙生物が発する【究極の愛の言葉】に託すことに決めた。それが、カー

ト・ヴォネガット著『タイタンの妖女』に登場する《ハーモニウム》だった。水星の洞窟に暮らす半透明ひし形の生物で、音（歌）をエネルギー源にしているハーモニウムは、飢え、妬み、野心、不安、怒り、宗教、性欲とは無縁で、他の生物を傷つけることをしない生物だ。彼らが互いに伝え合う言葉は二つしかない。私は、この二つの言葉をこの世で最も美しいメッセージだと思っていた。だから、その言葉を返信として送りますと先生に伝えた。

「ボクハココニイル、ココニイル」

「アナタガソコニイテヨカッタ、ヨカッタ」

先生からは、「私に恥をかかずまいと、暖かい言葉をあげがとう。」と返信が届いた。

だが、この話にはさらに続きがある。2006年、先生から一枚のCDが送られてきた。「第73回NHK全国学校音楽コンクール課題曲」とあるそれは、小・中・高それぞれで歌われる課題曲を収録したもので、先生は、高等学校の部の歌の作詞を依頼されたのだった。「ある真夜中に」と題されたその歌の歌詞には、思春期の恋心のような熱情迸る言葉が、私の書き送ったハーモニウムの二つの言葉をクライマックスに引用しながら綴られていた。

「ある真夜中に」

どこかの星の熱いため息が
花びらになつて降ってきた
花びらは舞いながらささやいた
わたしはここにいます

そしてあなたがそこにいてくださる

ああ何というしあわせ

たとい永遠にあなたの額に
たどりつけなくても

ある真夜中

どこかの星の熱いため息が
雪になつて降りしきつた

雪は身を揉みながら歌った

わたしはここにいる

そしてあなたがそこにいてくれる

ああ 何というよろこび

たとい永遠にあなたの唇に

たどりつけなくても

私が先生に対してどんな感想を述べたかは、記憶が定かではないが、おそらく「すごいですね!」と感嘆したと思

う。先生は、「てへ」とにつこり笑いながら、ペロツと舌を出したはずだ。

当時私は、先生が「思春期の恋心のような熱情を素直に綴った」ことに驚いたのだが、後に、先生は、そんな単純な人ではないと気づくに至る。

瀬戸内寂聴とは、自らの胸に湧き上がった情や愛や熱のすべてを原稿用紙にぶつけて、作品にしなければいけないと自らに課した人だということだ。25歳で家庭を捨て出奔する際、「小説家になりたいから家を出させてください」と夫に告げて以来、その言葉を十字架として背負いながら、私小説、伝記小説、随筆、ルポルタージュ、能、狂言、歌舞伎、オペラの原作と、書けないものは自分にはないとかかりに、死の間際まで現役作家として健筆を揮ってきたのが、瀬戸内寂聴という人なのだ。その覚悟と、生涯実践し続けたエネルギーを、私は深く感動、尊敬する。

映画が公開され、いくつかのメディアから取材を受けた私は、「寂聴最後の男」という惹句を冠され、映画の宣伝のためなると、恐れ多く否定しなかった。だが、映画の上映も終了した今、私がそんな風と呼ばれることを生前はまったく知らなかった泉下の先生への礼儀として、諒とし

ないこととしたい。

「先生、私はずっとここにいます」。

